COMBINED FLEET GIRLS COLLECTION FAN BOOK

VOLUME 04 **FOR ADULT ONLY**

夕張の日記より〜軽巡洋艦

八月一八日　工廠での業務が捗らない。鎮守府が慌しいなか、技術本部から送られてきた戦艦用試製主砲の調整に手間取り、今日の射撃テストは延期された。皆に申し訳ない限りだ。駆逐艦の子たちにひどく心配されてへこむ。疲れているのだろうか？　だけど、由良も五月雨ちゃんも長期の遠征で奮闘するなか、私ひとりサボるわけにもいかない。自慰二回。オカズは霧島さんと青葉が撮った、五月雨ちゃんの裸身。無毛の割れ目は本当に尊い。

八月二十三日　スパナと間違えて食堂のスプーンを持っていると明石さんに指摘され赤っ恥。ほかにも、何か大事なものを失くしたような気がするものの、それが何かを忘れてしまったようで、業務が手につかず。いよいよ絶不調か。何故かいろいろな艦娘が、休養を命じられた私のもとを訪れ、大丈夫だ、絶対に探しだすと言ってくれた。いったい私は何を失くしたのだろう？　由良や五月雨ちゃんなら知っていそうだけど、ふたりともまだ遠征中だ。頭に霞がかかったような気分のまま、部屋で五回も自慰をしてしまい、軽く自己嫌悪。五月雨ちゃんにおしっこをかけられたい。その中でなら、沈んでもいい。

八月二十六日　休養四日目。由良と五月雨ちゃんは何処まで遠征に行ったのだろうか。何度目かの自慰で絶頂した直後に、顔見知りの駆逐艦の子たちがやってきた。さすがに死にたくなっていると、皐月ちゃんがなにやら決然としたようすで私に言った。

「ボクたちがさ……しばらく、さみちゃんの、かわりに、なるから」

そして、皐月ちゃんは服を脱ぎはじめた——

睦月型五番艦
皐月

下着姿

『前世』で彼女とは長い付き合いだった。戦争が始まるずっと前、私が栄えある二水戦旗艦に着任したとき、皐月ちゃんは新設された二二駆のリーダーとして私のもとへやってきた。それから何度も編成が変わり、戦争中に南洋で再会。私が沈むまではずっと部下だった。そんな間柄だから、気心は知れている。こんなふうに「あぁ、少しおしっこの匂いがする子供ぱんつ尊いわ……」「……ごめん、ちょっと帰りたくなった」

胸部装甲

勝気な金髪ロリっ子として二度目の生を享けた皐月ちゃん、洋上でも戦うというより、元気に跳ね回っている印象。こっぴどく被弾して、ほんのわずかに膨らんだおっぱいを隠そうともせず帰投することもあって、そのたびに私は目のやり場に困る。「イヤ……ガン見してるじゃんいつも。今みたいにさ」

陰部

駆逐艦娘のいまだ性器とも呼べない割れ目ってなんでこんなに尊いのかしら。私は、目の前で真っ赤になりながら、軽装甲を身につけてぱんつだけ脱ぎ、スカートをまくる皐月ちゃんを見る。まったく発毛の見られない恥丘の下、股間にちょんと切れこんだ縦筋を、食い入るように見つめる。はぁ……尊い。TOUTOI。

性器

くにゅっ。と、皐月ちゃんのしなやかな指が、もぎたての桃のような大陰唇に沈みこみ、そのまま左右に押し広がる。足を広げてもほとんど中身の見えなかった割れ目が形を変え、ほとんど包皮に覆われた陰核と、小高い突堤程度の小陰唇や、ようやく指一本が通ろうかという膣口が姿を見せた。同時に、こぽり。と、愛液が溢れてお尻へ伝う。私は顔を近づけ、鼻から思いきり息を吸い、それだけで絶頂に達した。

放尿

性行為にしか使わない、自室備えつけのユニットバスに、大きく脚を開いて皐月ちゃんが腰かける。しばらくして、割れ目からお尻のほうへ薄黄色の水流が生じ、すぐに勢いよく正面へと吹きだす。十秒近い排泄を終えたあと、皐月ちゃんは潤んだ眼差しを私に向け、声を震わせた。「夕張姉ちゃん。……拭いて」

洗浄……？

これは、そう、皐月ちゃんの大事なところに残るおしっこを拭ってあげているだけ。たまたま、私の指が彼女の狭隘な膣に入りこんでしまって、そこから伝わる刺激に堪えきれない皐月ちゃんが、失禁しながら嬌声を上げているだけ。ものはずみで思わず、「夕張姉ちゃんのことッ……ほんとはずっと……好き……だったよぉ……」なんてあらぬことを、彼女は泣きながら、口走っているだけ……。

睦月型七番艦 文月

下着姿

こんなことがあっていいのだろうか。純真そのものといった風情の文月ちゃんが、お尻をすっぽり包む子供ぱんつ一枚の半裸で、頬を赤らめつつおずおずと私を見上げる。私は生きながらにして極楽浄土に達したのかしら？　ぽっこりとした下腹部の丸みがいかにも幼げで、あぁ心の高角砲が最大仰角。

胸部装甲

『恥ずかしい……けど、皐月ちゃんがやるって言うから』と、文月ちゃん。いまだ艦娘として現れていない水無月ちゃんを除けば、彼女は皐月ちゃんとならんで二二駆最後の生き残りだった。二時期、艦長どうしも友人だったはず。そんな記憶からか、二人はどこも仲がよく、文月ちゃんは皐月ちゃんのあとをついて回っている。何が言いたいかというと、炉っぱい尊い。

陰部

皐月ちゃんと同じく、まったく発毛の見られない、ただの割れ目だ。睦月型駆逐艦は旧式で小型だったためか、艦娘としては幼い姿となった結果無毛の子が多い。陰毛が生えているのは如月ちゃんと弥生ちゃんと……と考えたところで、脳内に駆逐艦娘の陰毛データベースが構築されている自分が恐ろしくなった。

性器

過熱したボイラーのように赤面しながら、〝まんぐり返し〟の姿勢で広げた大陰唇のなかから、未成熟な陰核や小陰唇、膣口が顔を出した。皐月ちゃんのと同じくらい幼くて、けれど、形ははっきり違う。ネットでたまに遭遇する、勃起した男性器はどれもこれも似たようなかたちで面白くないし、そもそも気持ち悪いけど、女性器は本当に十人十色だ。そして、すべてが尊い。

放尿

「夕張お姉ちゃん……出る……」熱にうかされたように呟き、割れ目をぐっと押し広げる。と、しょわわ……と、おしっこが噴出。ほぼ直下――すなわち浴室に寝そべる私の顔めがけて、ひたひたと流れ落ちた。浴室で水を浴びるのはまったく普通のことである。「小」は付くかもしれないけれど。

自慰

「夕張お姉ちゃんっ……あたし、お姉ちゃんが喜ぶなら、こんな恥ずかしいところも見せられるよ……？　……あたしたち、あたしじゃ、ダメかな……？　あの子より上手く、ひ、引っぱれるかもしれないよ」「文月ッ！　そこまでだ」突然、長月ちゃんの鋭い声が飛んだ。話が見えないんだけど……。

睦月型八番艦 長月

下着姿

「うう……恥ずかしいなぁ」二二駆のなかでも勇ましい長月ちゃんが、真っ赤になって、ぱんつ一枚になった。「普段はかないような可愛いぱんつ付けてきたくせに」「う、うるさいっ!!」皐月ちゃんの煽りに怒鳴る長月ちゃん。「ゆ、夕張姉にカッコ悪い下着なんて見せたくないじゃないか……」

胸部装甲

「その……夕張姉、貧相ですまない」照れまくる長月ちゃん。私は首を振る。「ううん。おっぱい、可愛いわよ」「……!!」一段と赤面する長月ちゃん。睦月ちゃんや如月ちゃんに比べれば、そりゃあたいへんささやかな胸部装甲だけど、こちとら泣く子も黙るロリコン軽巡。大丈夫だ、問題ない。

陰部

そういえばなんでこんなことをしているんだろう？と思いつつ、制服を着けてストッキングとぱんつを脱いでもらった。「こ……ここまで見せる、のか。やっぱり」「つるつるだから恥ずかしい？」と文月ちゃん。長月ちゃん、屹ッと涙目で彼女を睨むと、「つ、つるつるじゃない！少しだけ生えてきたんだ！夕張姉、見てくれ!!」とスカートをまくり上げる。たしかに、陰核包皮の上あたりにかそうな陰毛が数本。「わあ!?」まだ柔らか近で見ないで！嗅がないで!!」夕張姉、そんな間

性器

「ど……どうだ？　夕張姉……」「どう……って？」「私は皐月や文月、……五月雨のように可愛くはないから、せめて、その、ここだけでも可愛いといいなと、思ったん……だが」消え入りそうな声の長月ちゃんが、性器を広げている。ぴょこんと盛り上がった陰核包皮や、ひだとも言いがたい発展途上の小陰唇がうっすら色づいているのは、なるほど可愛いのかもしれないが、劣情を隠しようもない私の性器は、もはやだらだらと愛液を垂れ流すのみだ。

放尿

「うう……」ストッキングごとぱんつを下ろしてしゃがみこむや、じょろろろろ……と勢いよく排泄を始める長月ちゃん。色も匂いもかなり濃厚。「あ、朝から我慢してたんだ……」おしっこが私の足元まで流れてきた。思わず手を浸し、生温かさを感じてからハ舐めとる。理性が焼き切れた。

つながり

「夕張姉……夕張姉ッ」「私は、ここよ」彼女はコロンバンガラ島の浜辺で座礁し、ひとりで最期を迎えた。一緒に揚陸作業をしていた皐月ちゃんや、作戦直前に被雷して編成から外れた私のいないところで。「夕張姉ッ……ひとりにしないでぇ」ぎゅうう、と私の肩を掴む手に力が入り、長月ちゃんは達した。

睦月型九番艦
菊月

下着姿

「まったく落ち着きがないな、お前たちは」二三駆の菊月ちゃんが冷ややかに姉たちを見ている。ぱんつ一枚で。「兵士が肉体を晒すことに何の恥じらいがある？」「長月だってそれなりに鍛えているだろうに」「ヒトをナルシストみたく言うんじゃない！　なんだよ、つまらない下着はいて」「下着で防御力が上がるのか？」長月と菊月、同じ意味を持つ名の姉妹、なんだか険悪な雰囲気。

胸部装甲

「胸筋も鍛えてはいるつもりだが、いわゆる乳房というやつはたかが知れている」と菊月ちゃん。「別にどうでもいいが。これで深海どもどやりあっているわけではないからな。まあ、あなたのお気に召すなら幸甚だよ夕張」

陰部

「こんなところを見つめて楽しいのか？」菊月ちゃんが呆れ気味に言う。「女性器など、皆同じではないか」ぶちっ。「違う……全然違う」「夕張？」「そがんねぇ！　誰のぼぼでもねぇ！　同じや同じや思いよってぇ!!」「落ちつけ夕張！　佐世保弁が出てる！」「……オホン。とにかくね、違うのよ。あなたのと長月ちゃんのでも違う。あなたのほうが大陰唇に厚みがあって、陰核包皮は小さめだし、まだ発毛が見られないわ。陰裂も長いし」「そ、そうか。違いのわかる女なんだな……」

性器

「夕張……くすぐったい」、菊月ちゃんがじれったそうに声を上げる。「あと、手つきがいやらしいぞ」「いやらしいことしてるのよ」私の指ですっかり広げられ、露わになった彼女の性器にそっと息を吹きかけると、菊月ちゃんの身体がビクン！と大きく震えた。「なんなのさ……いったい」声も震える。「んん……ほんとうのきもちが聞きたいなって」「えっ……？」「菊月ちゃんの全部……、私たちに見せてよ」もう少し。もう少し、彼女の芯に迫る。

放尿

「こ、こんなのって」私の指示で、自ら性器を広げさせられた菊月ちゃんが呻く。「さあ……出して」意識して、ことさらに低い声でささやく。いつだったか、声だけはいいわよね、と由良に言われたっけ。果たして、「んっ……ああっ！」ぷしゃあ、と尿が噴きだす。あやまたず、大きく開けた私の口へ。「ああっ⁉ ダメ、ダメ、夕張……っ」「ふっ……あふっ」身体の芯から燃えあがるのを感じながら、私は飲んだ。菊月ちゃんのすべてよ、この夕張に届けとばかりに。やがて、「……ああああぁぁ」菊月ちゃんが泣き声をあげた。

遥か君を離れて

「私っ……私も、最期はひとりだった」まだミッドウェーでの敗北を迎える前。私たちはツラギ島を確保したが、その翌日、駆逐艦・菊月はツラギ島で爆撃に遭い大破。放棄された船体はそのまま朽ちるに任された。その場に、当時二三駆を統率していた六水戦旗艦の私はいなかった……。「長月が、羨ましかった。」私は何の武功も挙げられぬまま沈んだから……。輪に、入れなかった」「そんなの！誰も気にしてない！」まだ下着姿の長月ちゃんが悲しそうな怒声を上げる。私はひいひい泣く菊月ちゃんを抱きしめる。もう二度とひとりにしないと、抱きしめる。

睦月型十番艦 三日月

下着姿

睦月型十女・三日月ちゃん。姿かたちもだいぶ幼いけれど、二三駆でキャリアをスタートし、航空戦隊に単身赴任したりしてあちこちで活躍した頑張り屋さんだ。今も私のために半裸で頑張ってくれている。「夕張さん……その、興奮してもらえていますか？」待って、ごめん、鼻から魂抜けかけた。

胸部装甲

セーラー服を捲りあげ、ぺったりぺったんとオ〆マトペの聞こえてきそうなおっぱいを、恥ずかしそうに晒す三日月ちゃん。ああ、そうだ、この一生懸命な感じ、五月雨ちゃんによく似ているんだ。そうこぼすと、三日月ちゃんが一瞬、悲しそうな目をした気がした。

陰部

子供ぱんつをずり下げてスカートをめくり、まるっきり幼い割れ目を見せてくれる三日月ちゃん。人間の幼女相手にこんなことをやっていたら、即決裁判で銃殺刑だろう。艦娘でよかった、と心底思う。

性器

「見て、いいですよ」その声に導かれるまま、そっと指で大陰唇を押し開く。「どう……ですか？」私の、おまんこ」「ぶっ！」思わず咳きこんでしまった。「み、三日月ちゃん、どこでそんな言葉を」、「私も、そこまで子供じゃありません。」夕張さんに見られて、すごく興奮しているんですよ……ボイラーが吹き飛んでしまいそう」なるほど、しとどに濡れた膣口からは、濃厚な〝匂い〟が漂ってきて、あてられそうになる。

放尿

「おしっこしていいわよ」人間が乳児にそうするように、座ったまま三日月ちゃんを抱きかかえ、後ろから耳元にささやく。と、「あ……あっ、出……ます……」しょわしょわ。陰裂からす黄色い尿が吹き上がり、浴室の床に広がっていった。「はあああああ」がくがくと、全身を震わせる三月ちゃん。達してしまったらしい。ちょろちょろと排泄しながら余韻に浸るさまは、とてつもなく淫猥だ。

君といこう光

「な……っ」まだ目元の赤い菊月ちゃん、三日月ちゃんに押し倒されて、驚きと羞恥の入り混じった声をあげている。「なに、を、するんだ」「菊ちゃん……愛してる」「えっ」「望っちゃんだってそうよ。睦っちゃんもきさちゃんも、皐っちゃんも……私たちみんな、あなたを愛してる。姉妹だもの。」「でも、戦功とか、関係ない」「……」「言葉で何を言っても、不安だよね。だから、身体で伝えるの」「あ、あっ」首筋に、唇に、膝頭に、おへそに、陰核に。指で、舌で、唇で、愛撫が続く。「み、か」ぽろぽろと涙を流す菊月ちゃん。それは喜びなのか、悦びなのか。「きく、ちゃん」三日月ちゃんも、泣きながら菊月ちゃんの愛液を啜っている。私は溢れる涙を拭わず、彼女たちが再び結びつくさまを、最後まで見届けた。

陽炎型十番艦 時津風

下着姿

「夕張さんが大変なことになってるって聞いたけど、いや、ほんとに大変だね」十六駆の時津風ちゃんがにやにやと私たちを眺める。陽炎型の子はみんな、どこか不遜だ。「大丈夫だよ、雪風が探しにいってるから。あの子なら必ず助けてくれる」「？」「ま、いいや。あたしの裸でも見て元気出しなよ」言うが早いか、ぺろんとぱんつ一枚に。なんとも……その……先進的なデザインだ。今の今まで肌を晒していた睦月型の子たちが、きゃーきゃー騒いでいる。

胸部装甲

「どお？　興奮するでしょ？」つるぺたの胸を張り、どや顔の時津風ちゃん。「雪風あんなんだけど、ちょっとだけおっぱいあるんだよね。そこいくとあたしは純正ロリだから、安心してオカズにしてね」うぅ、私の童貞マインドが傷つく……五月雨ちゃんみたいな純真さがほしい。

陰部

「さ。両手ふさがってるから、ストッキング下げて紐ほどいて」「で、でも……」「そうしないと見られないよ？」「……」……」「あっ……えへへ。夕張さんにあそこ、見られちゃった」

性器

「はい。ロリまんこ」と性器を広げくちっ、と時津風ちゃん。よくる時津風ちゃん。よく見ると、頬はかなり上気して、瞳はじっとり潤んでいる。「興奮……してるのね。もっと余裕なんだと思ってた」

「……おまんこ晒して興奮しない子はあんまりいないんじゃないかな。雪風たち以外でこんなところ見せるの、夕張さんがはじめてだもん……ね、どお？」

「うん……小さくて、ピンク色でかわいい。そして、いやらしい」

「……へへ、改めて言われると、照れちゃう」

放尿

「いつものやり方、見せたげる」言うが早いか、時津風ちゃん、上着の裾をからげてお尻を出すとストッキングを下ろし、ぱんつをするっと取り去って中腰になった。次の瞬間、後ろ向きに排尿が始まる。「ふう……我慢してたんだあ」浴室に新たな尿溜まりができていく。「夕張さん……すごい、やらしい顔してる」

自慰

「はっ……ん。あっ」幼げなつくり膣には似合わないほどの蕩けた表情で、口に左手の中指を出し入れし続ける時津風ちゃん。時折、右手で陰唇や陰核まわりをこね回す。「……どこで覚えたの？」「『こっち』来て、すぐ……アマツが、夜中に雪風と、島風にえっちなことされてて……最初びっくりしたけど、教えてもらったらすごく気持ちよくて……。初風もしょっちゅう、妙高さんオカズにしてるし。あたし、おまんこいじってると、ほんとに生まれ変わったんだなって思う……。生まれ変わって、よかったって……思うの。あ、あ、イくっ……ゆきかじぇ……」

陽炎型十八番艦
舞風

下着姿

「大丈夫よ夕張さん！」いつも軽やかな足取りの舞風ちゃんが、今もどこかふわふわと私にまとわりついてくる。「トッキーの言うとおりだから！　それでも不安なときは身体動かすのが一番！」「私インドア派なので……ていうか不安って何？」「……重症だなぁ。まいいや！　あたしも裸見せたげる」陽炎型のほとんど末妹な舞風ちゃんだけど、長姉の陽炎ちゃんに似て手足がスラリと長い。将来はすごい美少女になりそう。今はまだ、ぱんつ丸見えではしゃぎ回る無邪気な女の子だけどね。

胸部装甲

フフン、と悪戯っぽい笑みを浮かべつつ、ベストとワイシャツをはだけておっぱいを露出。「そろそろ、ブラつけたほうがいいんじゃない？」「おっぱい全然ないって思ってたけど」「睦月型の子に比べたら膨らんでるわよ」「ちょっと！　引き合いに出して disならないでよ夕張姉ちゃん!!」

陰部

ぱんつをずらすと、わりあい発達した性器が見えた。でも、発毛はまだ先のようだ。「はやく陽炎お姉ちゃんみたいに大人っぽくなりたいんだけどなあ」私はあんまり育たないでほしいです。

性器

「ここ見せるの、夕張さんがはじめてです……ちゃんと、見てね？」とろとろと愛液の溢れる舞風ちゃんの性器を、しっかりと目に焼きつける。厚ぼったい陰核包皮と、ぷっくり真珠のように膨らんだクリトリス。そして、まだ色素は沈着していないけれど肉厚な小陰唇。どのパーツも「女」になる準備は万端と自己主張している。それでいて陰毛はまだ産毛程度なアンバランスさはいかにも少女的で、私は思わず愛液を舐めとっていた。

「あん。ま、待って、おしっこ出そう……」「出して！」

放尿

「だいたい入渠中にすませちゃってるわ。陽炎お姉ちゃんに見つかって怒られたけど、お姉ちゃんもドックでおしっこしてること知ってるよって言ったら慌ててた。それから一緒におしっこするようになってね。時々、並んでこうやって、立ってあそこ広げてすることも……」言葉どおり、陰裂が開く程度に広げられた"あそこ"から、ちょろちょろ、しゃあああ……とおしっこが放たれた。放尿しながら、舞風ちゃんがぽつりとつぶやく。「野分と……いっしょにおしっこしたいな、こうやって」

自慰

私の膝に顔をうずめた舞風ちゃんが、激しく喘いでいる。私は左手で、彼女の頭を優しく撫でつづける。そこから伝わる、彼女の震え。膝を借りたい、と舞風ちゃんは言った。自慰をすると時に、気持ちよくなるのと同とか。とても怖くなるのだ、とする。「絶頂は死にも似ているオーガズムを迎えるたび、死の記憶が脳裏に去来する、とすれば、舞風ちゃんとしても不思議ではない。話に伝え聞く、地獄さながらの死のありさま……。「の、のわき、のわき、あ、あ、あーっ」ぷしゃあ、ちょろちょろ……泣き声をあげ、おもらししながら、舞風ちゃんは私の膝の上で果てた。

朝潮型九番艦 霰

下着姿

おとなしい霰ちゃんまでやってきて、もじもじとしている。神通の秘蔵っ子たる十八駆の長女で、あの陽炎ちゃんが「お姉ちゃん」と呼び慕う子だ。身体つきなんか十八駆でもいっとうロリっちいのに、見かけによらないものである。睦月型の子たちがみんなリーブラだったので、キャミがなんだか新鮮。

胸部装甲

エスカレーター式のお嬢様小学校みたいな外部装甲だなあ、と常々思っていたのが運の尽き（？）。気がつけば、服を全部着こんだ状態で上下ともはだけさせるという、我ながらさすがにアカン感じの格好をさせていた。涙目でうつむく霰ちゃんの、ようやく球形をとりはじめた乳房はいかにもロリ・タな趣だ。

陰部

霰ちゃんがかわいらしいぱんつを下ろそうとする直前、それに気づいた。「あっ……」うっすらと生えた陰毛の真下、まだはっきり見える割れ目から漂う強烈な鉄の匂い。そして、ぱんつのクロッチ部分にあてがわれたシートに広がる赤茶けた染み。「……ごめん」「いえ……こういうのも好きなのかなって、思って。……どうして艦娘にも月のものがあるんでしょうか？」

放尿

ぱんつを下げ、しゃがんで勢いよくおしっこを出すのは、もう学校からの帰り道姿で尿意を我慢できなくなりすんでた小学生のソレにしかなりえない。尊い。実際、遠征見ずに中腰で喰いる、任ぱが中えっ道姿で

性器

「すごく、恥ずかしい……でも羞恥に声を潤ませ、霰ちゃんです」血に染まった性器を広げる。陰が充血気味なのは、興奮の核経かにあることの証だ。さまざまな刺種類の〝女〟の匂いが鼻腔を激し、私は軽く達しそうになる。

自慰

「んっ……ぬい……」不穏な名前を口にしながら、指で膣内を激しくかき回す霰ちゃん。左手はもう経血まみれだ。「ぬい……ぬいっ」紛れもなく、戦艦並みの眼光をもつ、十八駆の末っ子・不知火ちゃんのことだ。うーん、あの子もずいぶんいろんな子に好かれているのね……。とつぶやくと、「それ天然で言ってるんだよね？」と皐月ちゃんが呆れたように言った。はて？

朝潮型十番艦
霞

下着姿

「霞について来てみれば」じろり、と私を睨む霞ちゃん。こ、怖い。「とって食いやしないわよ！　しっかりしなさいよ、あんたがそんなことでどうすんの。ロリコシのくせに、こんなに駆逐のみんなに心配かけて」「心配……」「霞、今の夕張姉ちゃんに言っても」「まったく……ホラ。脱いでやっだわよ」

胸部装甲

「論評とか、要らないから！」、赤面しつつ全裸になる霞ちゃん。発展途上なおっぱいがかわいい……なんてことよりも、鍛えあげた身体がすごいの一語に尽きる。不知火ちゃんが腹筋割れてるのは有名だけど、アレは十八駆の次女たる霞ちゃんに影響を受けたようだ……。

陰部

陰毛は恥丘に少し。その下は睦月型の子たちとあまり変わらない、色素の沈着もない、ただの割れ目だ。こうして見ると十八駆は全員毛が生えているのね……さすが、と謎の感心。「だから論評は要らないって言ってるでしょう!?この変態!!」

性器

「ううっ……、こ、このバカが少しは元気になるんなら、まんこ見せるくらい安いもんよ……！」霞ちゃん、涙目でくぱぁ、と大陰唇を広げる。クリトリスも小陰唇もかなり小さい。「だから論評すんなって言ってんでしょうがこのクズ!!」

放尿

「うぅ、バカぁ……こんなのぬいや清霜に見られたら死ぬ……」後ろにつきだしたお尻に手を回して性器を広げ、そのまま排尿、というのをプロデュースさせていただいた。この子も不知火ちゃんを「ぬい」呼びなのね……。

自慰

性器を何度も収縮させ、絶頂の余韻に浸る霞ちゃんに、あえて尋ねる。「やっぱり不知火ちゃんなの？」「……わかん……ない……。あたしにとって……ぬいはすごく特別なのは……たしか。でも、同じくらい清霜だって大切に想ってるし、大和や矢矧、磯風たちだって……。ハハ、なんだあたし、ただの節操なしの淫乱じゃん……こんなの、嫌われちゃうよぅ……うぅ、うぁあぁ」「何泣かしてんだよ、夕張姉ちゃんのバカ！」

夕雲型十七番艦 早霜

下着姿

「不知火さん……」最近顕現したばかりの、夕雲型の早霜ちゃんが音もなく傍に来ていて、泣いていた霞ちゃんも私も、私を叱っていた皐月ちゃんも飛び上がった。「通過儀礼のようなものだと伺ったので……私なんかの身体でよければ、どうぞご覧になってください」するすると服を脱ぐと、スラリと手足の長い肢体が露わになった。「か……格差がぁ」皐月ちゃんが呻く。

胸部装甲

大人っぽい黒いブラ（最近黒い下着を買ったのにどれほど勇気が要ったか！）を下へずらして乳首を出すという、なんとも扇情的な方法で、薄い胸部装甲を見せてくれた。「つるぺたのくせに生意気な下着……とお思いですか？」「いいえ、よく似合っている、わよ？ねえ霞ちゃん」「……」

陰部

「中途半端で、お恥ずかしい……です」と赤面しつつ語る陰毛は、割れ目の上端付近に集まって生えているけど、まだまだ少ない。なんとなく手を伸ばして摘んでみると、しっとりと湿っていた。「こういうの……好きかもしれません」

性器

「失礼します……」蚊の鳴くような声で言うと、浴槽のふちに腰掛けた早霜ちゃん、ぐにっ……と大陰唇を押し広げた。外からではわからないほど複雑な形状の小陰唇や、完全に顔を出したクリトリスが露わになる。「すごい大人っぽい……」皐月ちゃんが食い入るように見つめるそばで、霞ちゃんがふいに吐き捨てた。「ぬいで毎日抜いてるからでしょ」

自慰・放尿・懺悔

「霞ちゃん」思わず鋭い声を出すと、霞ちゃんがじっとり湿った眼差しで私を睨みつけた。「そう……です」性器を激しく刺激しながら、早霜ちゃんが息も絶え絶えにこぼす。「あの日……私を助けにきて、そして目の前で散った不知火さんが、私は」「……」「私を、憎んでいますか、霞……さん」重い沈黙。「正直」霞ちゃんが口を開く。「あんたが来たら冷静でいられる自信はなかった。でも……それじゃあ、司令を吊るしあげたあのクズ共と変わらない」声が震える。「それに……あんた、そんなに苦しんでるじゃない」「ひっ」ひきつけのような声を上げ、早霜ちゃんが果て た。しばしのち、じょろろろ……と失禁。「どうして」霞ちゃんが涙声で言う。「誰かを好きでいること が、こんなに苦しいの」

夕雲型十九番艦 清霜

下着姿

「裸見せたら戦艦にしてくれるって本当!?」元気よく飛びこんできた清霜ちゃんの発言に、その場の全員が半眼で私を睨む。ドックで会った時にホンの冗談でね?」「こんな純真な少女の心を弄ぶとは」「クズ軽巡」「由良さん帰ってきたらしばいてもらおうよ」「ねぇ脱いだよ?」「あっ」下着姿の清霜ちゃんはヤバいくらい可愛かったわ……。

胸部装甲

「おぉ……」指でつついてもほとんど沈まなさそうな薄い胸が尊すぎる。「今はまだ小さいけど、いつか戦艦になったら武蔵さんみたいになるよね?」「お願い、やめて!」

陰部

「夕張さん、ここが好きなの?」なんかもう輝かしく見える、スッと墨でひいたような割れ目をサッと撫でたものだから、私はドッと鼻血を吹いた。「そ……そうね、そこが嫌いな艦娘なんていないと思うわ」「オイ、主語がとてつもなくデカくないか夕張姉」

性器

「えへへ。ちょっと、恥ずかしいかも」と言いつつ、くにっ。と性器が広げられた。意外に発達した小陰唇のひだを、思わずつついばみたくなるけれど、たぶんそうしていいのは私じゃなくて。「ここ、自分で触ったり、する？　清霜ちゃん」「うん。霞ちゃんのことを考えながら触ると特に気持ちいい、です」「!!」少し離れたところにいた霞ちゃんがすごい顔になった。清霜ちゃん、霞ちゃんにまっすぐな視線を向ける。「清霜は、霞ちゃんが、好きだから。この前も言ったけど」

強い気持ち・強い愛

「きよ、しも。あたしは」霞ちゃんが掠れ声で言う。「ごないだも言ったわよね？」「うん、知ってる。不知火ちゃんが好きだって」事もなげに言ってのける清霜ちゃん。「いつも怒ってるけど、ほんとはいろんな人のことが、大好きだって。私知ってる」そして、「そんな霞ちゃんのことが、私は好きだもん！」「やめてよ!!」霞ちゃんが泣き声をあげた。「あんたも、ぬいも……見送ることしかできなかったクズなあたしが、好いていていいんだよ！」清霜ちゃんたちを好いても、早霜姉さんが不知火ちゃんを好いても、私が霞ちゃんを好いても、全部いいの！　だって、みんなまた逢えたんだもん！　それで嬉しくても、気持ちよくても、つらくても、全部ひっくるめて私たち、いいの！」「うあああぁ」泣き崩れる霞ちゃん。私たちもみんな泣いていた。……その後のふたりの失禁レズセックスに超興奮した件は、また後日。

白露型三番艦 村雨

下着姿

「やれやれ……手間のかかるお姉さんね」村雨ちゃんが穏やかな笑みを浮かべ、半裸になった。「村雨ちゃん！　さみちゃんたちは!?」皐月ちゃんたちが彼女のまわりに集まっている。よく聞こえない……「捜索」「反応」「艤装」とぎれとぎれに何か聞こえる。なんだか頭が痛い。「大丈夫。あの子は強い子だから」村雨ちゃんのその言葉だけが、妙にはっきりと、耳朶を打った。

胸部装甲

「あんまり『小さく』なくてごめんね!?」妙に発育のいい白露型の中でも、最近ぐっと大人っぽくなった村雨ちゃん。白露ちゃんより全然長女っぽいが、胸も実に長女っぱい。「でもね。さみも、いつかは成長するのよ？」ヒエッ……

陰部

今日私が会ったなかでは、いちばんしっかりと陰毛が生えている。それほど多いわけではないけど、割れ目はもう前からではほとんど見えない。「すずにも生えてきたし、さみもそのうち」「あああ聞こえない聞こえない」

性器

「つゆが最近、よく見たがるのよ。ここ。しかも自分から見せてくるから、姉妹で見せ合いっこになるんだけど、そのたびに大人っぽくてエロいねって触ってきて、困っちゃう。だって左側のビラビラだけ大きくて、なんかヘンじゃない？　自分じゃあんまり好きじゃないんだけど、つゆは気に入ったみたいでね……一度なんて、顔つっこんでくわえられたのよ！　このままつゆが夕張さんみたいな変態になっちゃったら、私どうしよう」「ひどい」「ましてや、はるまで影響されたりしたら……！」「それは本当にひどいわ！」「ええ！」

放尿

「やだ、夕張さんと趣味が合っちゃうの？……否定できないや。私も女の子のおしっこで、わりと興奮するし。ゆうとかはるとかが、ふざけてドックでおしっこしてるのを叱るけど、あとで自分でもしいーってしたり、そのときに思わず、くちゅくちゅって……ね」

自慰

「ちょっとちょっと！　私が整備した魚雷、そんなことに使ってたの!?」ぐちゅ、「んっ、だって……これ、すっごい、気持ちいいんだよ……。してるうちに、膣でイケるようになっちゃった」ぐちゅ、ぐちゅっ「あ、あっ、あぁぁ……」がくがく、がくっ「……おまんこ、気持ちいい……」

白露型五番艦 春雨

下着姿

「姉さんたち……こんなことしてていいの？」この夏に現れた、二駆の春雨ちゃんが不安げに私たちを見ている。「今だって、ふたりとも」「大丈夫」村雨ちゃんが伏し目がちに答える。「……そう信じるしかないわ。闇雲に捜索隊を増やすことも、できないし。それに」チラと私を見て、「今の夕張さんを放っておくわけにもいかないでしょう？」「……わかった」なにやら意を決したように、春雨ちゃんもぱんつ一枚に。いったい今日は何の日なの？

胸部装甲

「うぅぅ、夕張さんのえっち……」涙目で私を睨む春雨ちゃん、ぐうの音も出ないほどかわいい。五月雨ちゃんや涼風ちゃんのお姉さんなのに、同じくらい幼い印象を受ける。それでもおっぱいは睦月型の子たちより全然育っているあたり、さすが白露型だ。

陰部

彼女も、割れ目の上端あたりにちらほらと陰毛が生えつつある。どうやら本当に、まだ生えていない白露型は五月雨ちゃんだけらしい。早く遠征から帰ってこないかな。頭がひどく痛む。

性器

「おまんこ広げるわよ」あえて、普段使わない語彙を囁いてみると、春雨ちゃんの紅潮しきった顔がさらに湯だったように見えた。大陰唇に両の指を添え、ゆっくりと広げる。目立たないクリトリスや小陰唇、小さな膣口。未成熟だ。「知ってる？　村雨ちゃんね、ここに魚雷を出し入れして、ひとりエッチするの」「うそ……」目を丸くする春雨ちゃん。「すごく……気持ちよさそうだったわ。あなたの名前呼びながら」「えっ……えっ……」血管が破れるんじゃないかというくらい赤面する春雨ちゃん。キュッとしぼんだ膣口から、とろり、と愛液が溢れる……。

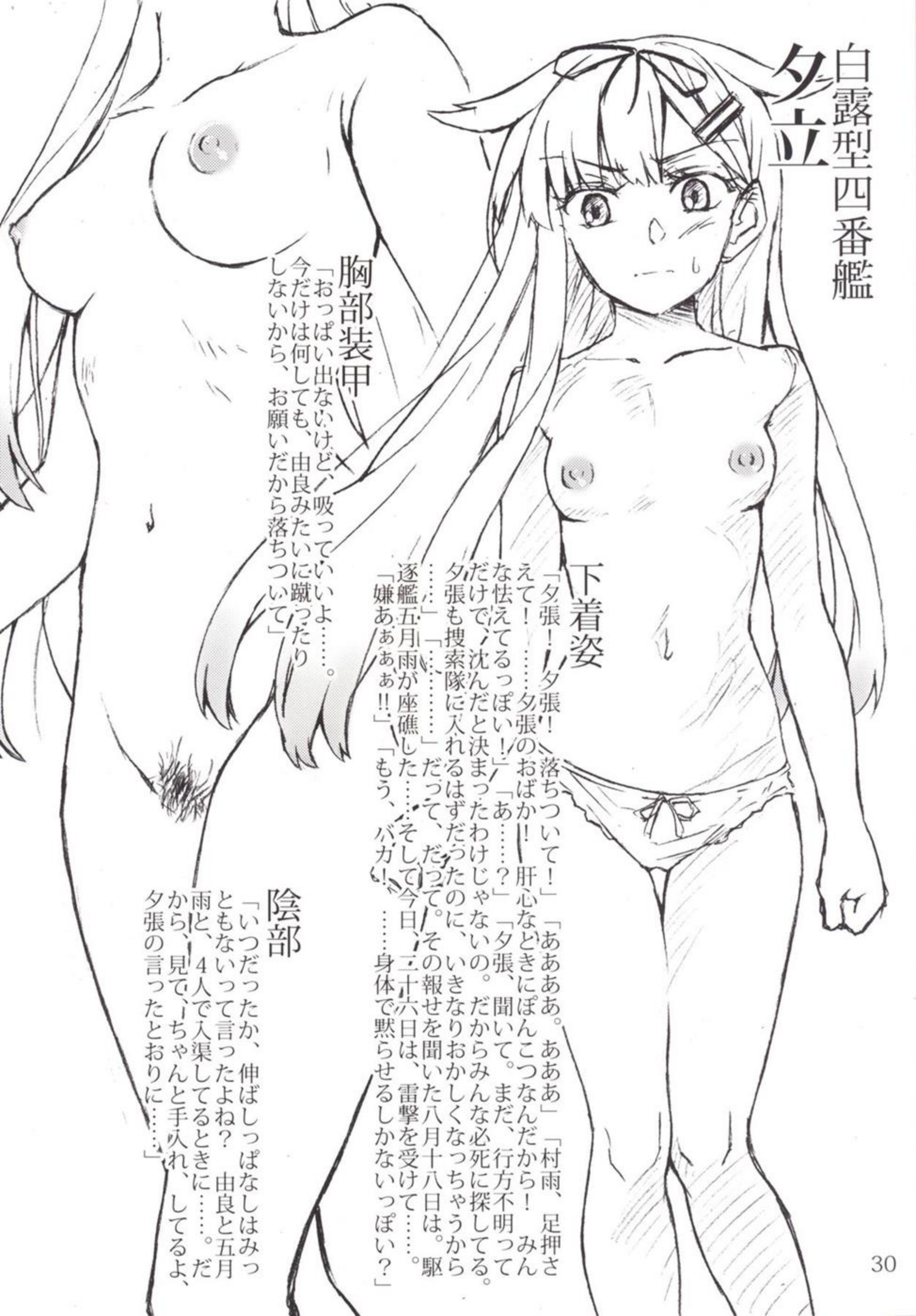
放尿

部屋備えつけのトイレに腰かけさせ、足ごと性器を広げる。「さあ、出して……。しー、しー」「うあ……」しゃあああ、と便器の中へ一直線に尿がほとばしる。今日はじめて、トイレで用を足した子かもしれない。

「……こんなの、ちがう」排尿を終えた春雨ちゃんが、ぽつりとつぶやいた。「気持ちいいけど……ドキドキするけど……今の夕張さん、おがしいもん」「はる？」村雨ちゃんの声が鋭さを帯びる、が。

「正気に戻ってよ夕張さん！　わかる!?　由良さんとさみちゃん、遠征中に行方がわからなくなって、もう8日間もみんなで探しているのよ!!」

「へっ？」



白露型四番艦 夕立

胸部装甲

「おっぱい出ないけど、吸っていいよ……。今だけは何しても、由良みたいに蹴ったりしないから、お願いだから落ちついて」

下着姿

「夕張！　夕張！　落ちついて！」「あああ。ああああ」「村雨、足押さえて！……夕張のおばか！　肝心なときにぽんこつなんだから！　みんな怯えてるっぽい！」「あ……？」「夕張、聞いて。まだ、行方不明っただけで、沈んだと決まったわけじゃないの。だからみんな必死に探してる。夕張も捜索隊に入れるはずだったのに、いきなりおかしくなっちゃうから……」「……」だって、だって。その報せを聞いた八月十八日は。駆逐艦五月雨が座礁した……そして今日、三十六日は、雷撃を受けて……。「嫌ああああ!!」「もう、バカ！……身体で黙らせるしかないっぽい？」

陰部

「いつだったか、伸ばしっぱなしはみっともないって言ったよね？　由良と五月雨と、4人で入渠してるときに……。だから、見て、ーちゃんと手入れ、してるよ、夕張の言ったとおりに……」

性器

「改造して……ホラ、こんなに広がるようになったよ……。由良のこと考えていじってるからっぽい……？　夕立にだけは、こういうこと教えてくれるよね、えっちな夕張は¥……」

放尿

「夕張のせいで、おしっこするのがすごくえっちなことに思えてきたっぽい……。海のうえでするときも、鎮守府のトイレでするときも、すごく興奮しちゃう……。由良や五月雨も、今頃どこがでおしっこしてるんじゃないかな……」

「ううっ……由良ぁ……さみ……」

「うあああああああん」「ゆ、夕立あんたが泣いてどうするのよぉ……」「だって、だってええ。ゆ、由良が、五月雨が死んじゃったら、どうしよおおお」「死……嫌、嫌ぁ、さみちゃん死んじゃやだあああ」「は、春雨ちゃん大丈夫だよ……大丈夫だよおおおうえええええ」「皐月ちゃん泣いちゃダメだよおぉぉぉ」「わあああああああん」火がついたように大声で泣きはじめる駆逐艦娘たち。大合唱は日が暮れるまで続いた……。

「……いや、だからって、いくら心労のあまり錯乱してたからって、駆逐艦の子たち相手に不埒な行為をはたらいていい理由には普通ならないからね？」

「面目ありません……」

「まったく、吃驚したわよ。そりゃあ、完全に通信機能が逝かれたからって、開きなおってのんびり寄り道しながら、自力で戻ってきたのはちょっと軽率だったわ。んなに心配かけといて、おみやげ持ってひょっこり帰ってきたら、呆気にとられるわよね。……でも、おれのあんたや夕立たちが裸で抱きあって泣いているあの光景は、ちょっとばかりクレイジーだったわ。五月雨ちゃん、

ショックで寝こんじゃったし。まあ、長旅の疲れもあるとは思うけど……」
「……なんか」
「うん？」
「なんかね。もう一度こうして、皐月ちゃんや五月雨ちゃん、夕立ちゃん、それに由良たちに会えてよかったなって思った」
「……駆逐艦の子をひん剥いておしっこさせた感想？」
「うん」
「変なの。……ただいま、夕張」
「おかえり、由良」

おしっこれくしょん　駆逐艦編　参
Combined Fleet Girls Collection FAN BOOK Vol.04

発行日　2014年10月19日

発行サークル　LUNATIC PROPHET
web http://circle.lunaticprophet.org/
pixiv id=92903

発行人　有村悠　Yuu Arimura
e-mail edgeoftheseason@gmail.com
twitter id=@y_arim

印刷所　株式会社　くりえい社
web http://www.kurieisha.com/

PRODUCED BY LUNATIC PROPHET

さあ、色々試してみても
いいかしら？

2014.10.19.